

# 創立十周年記念号に寄す

岡 山 大 学 長

清 水 多 栄

東洋のカールスバードとしての三朝温泉の名は世界的であるが、ここに本学が温泉研究所を設置してより早くも十年を迎える。尤も周知の如く、田村於兎学長時代当研究所が地元三朝村の寄附を得て、温泉の医学的研究と応用を目的に、岡山医科大学三朝温泉療養所の名で発足したのは昭和十四年であつたから、その濫觴は二昔近くも前のことである。昭和十八年、温泉内科学講座が創設されて放射能泉研究所と改称、本格的な研究機関として脱皮前進したが、時恰も大太平洋戦争中であつたため、折角の仏を作りながら、魂を入れるべき業蹟をあげるには多くの障害があつた。しかしその中であつて当時の初代療養所長浅越嘉威助教授、同代理関正次教授の払つた創成の労苦は並ならぬものがあり、よく後の基礎を築いた。昭和二十四年林道倫学長の代に及んで新たに温泉化学講座を開設して主任に梅本春次助教授を担当せしめ、同時に各種研究治療施設を拡充、研究所の発展にエボツクを劃した。新制大学切替えと共に療養所を医学部附属病院三朝分院として附加し大学直属の附置研究所となり今日に至つては改めて述べるまでもなからう。

この間研究所が放射能泉は申すに及ばず、一般泉質温泉の学理応用に関して成しとげた医学的総合研究の質量は決して少くない。殊にラドン泉、緑バン泉研究中、三朝温泉にトロンが含まれているのを発見、これが各種疾患に及ぼす治療的作用機序を闡明したこと、及び鳥取県下三百余种にのぼる温泉源泉の化学的分析表を完成した業蹟等は特筆に値する。二代目研究所長として終始研究所の育成に献身した大島良雄教授の功勞は、温泉学会に寄与した佳果と共に、長く銘記されなければならない。

由来世界有数の温泉国である日本では、古くから湯治の庶民的な療法として深く愛されて来た。しかしその医療的効果は民間信仰の域を出せず、これに科学的メス加えられた歴史は極めて浅い。殊に近時、温泉地はしばしば不真面目なる遊樂施設と化した感があり、垢も恥もかき捨てようといった雰囲気がいたる所見受けられるのは遺憾この上ない。温泉の医療化保健化が普及してない証拠である。浴客の多いこと日本有数と称せられる三朝温泉にしても例外をなすものではない。医療施設の貧困が原因といえよう。万事に貧しい日本においては、温泉は文字通り恵まれた国民保健の天然資源である。温泉の科学的社会化は、その意味で保健衛生にとつて未開發電源にも比すべき価値をもっている。当研究所が今日まで果して来た役割が高く評価されるべきは勿論ながら、その将来に期待するところはそれに数倍するものがある所以である。故田村学長の慧眼勇断と、これを引継いで独歩の態勢を確立した林前学長の達識、及び研究所を鋭意育成して今日あらしめた大島所長の精進に惜しみなく敬意を表したい。

今や温泉研究所創立十周年記念号を発刊するにあたり、温泉医学の洋々たる前途に思いを致すこと切なるものがある。温泉を遊山気分の湯治から、科学的な湯治に高めることは、特に日本の科学者にとって有意義な仕事といわねばならない。それには、単に研究施設を有するだけでなく、同時に完備した臨床機関を併置することが最も手近で望ましい方法である。そうしてこそ真に庶民的にして科学的な温泉医学が生長してゆくのである。わが温泉研究所の明日もこのようなものでありたいと考える。とまれ、意義ある十周年を一里塚として、全学的関心の下に、所長はじめ所員諸氏の自愛健闘を心から希い祈つて止まない。